

『日本国語大辞典』と『福恵全書』

荒尾 禎秀

Nihon Kokugo Daijiten (日本国語大辞典) and *Fukukei Zensho* (福恵全書)

Abstract:

・ The Chinese book *Fukukei Zensho* (福恵全書) is used as the examples of the *Nihon Kokugo Daijiten* (日本国語大辞典). This study is a discussion of how these examples are used and their roles. As a result, it was clarified that both the first and second editions of the *Nihon Kokugo Daijiten* use the examples in *the Daikanwa Jiten* (大漢和辞典). In many cases, the example is useful for considering the history of the word, but headwords that do not have Japanese examples, the examples cannot play a role. On the other hand, from the side of *Fukukei Zensho*, it is presumed that this book is related to the modern Japanese vocabulary, and it is considered to be useful for its research. In the next revision of the *Nihon Kokugo Daijiten*, it will be necessary to devise ways to use the Japanese engraved book of *Fukukei Zensho*.

Key words

Nihon Kokugo Daijiten (日本国語大辞典) *Fukukei Zensho* (福恵全書)
Daikanwa Jiten (大漢和辞典) the examples

要旨:

漢籍『福恵全書』は中国書としては比較的多くの用例を『日本国語大辞典』に提供している。その辞書における用いられ方を検討するとともに、『福恵全書』の日本語学における資料性について言及した。『福恵全書』の引例は『日本国語大辞典』の初版当初からあり、その源泉は『大漢和辞典』にあると認められる。『日本国語大辞典』の第二版は初版の引例を多く受け継いでいる。その援引にあたっては独自の用例点検が行われていて、引用文もほぼ正確である。『日本国語大辞典』での漢籍『福恵全書』の用例の多くは、当該日本漢語の語史の推測に有効なポジションを与えられてい

る。しかし、国書の用例がない見出し語での『福恵全書』の用例の役割についてはいささか疑問がある。

一方、中国版本及び和刻本の『福恵全書』については、日本語例との関係からみて近代日本漢語の歴史や語史の研究にとって資料的価値が十分にあることがわかる。大型国語辞書でのその利用については和刻本の訳解部分も含めて、なお有効活用する方法の検討が期待される。

キーワード：

日本国語大辞典 福恵全書 大漢和辞典 用例

1. はじめに

『日本国語大辞典』は膨大な項目を立てて、そこに多くの用例を、かつ可能な限り初出例を示した点で歴史的に記録される国語辞書であることは言を俟たない。初版を改良して進化した現行の第二版は、やがてはまた更なる変身を遂げるであろう。

この『日本国語大辞典』第二版で取りあげられている資料は、別巻の「出典一覧」についてによれば約3万点という。

本稿ではその出典資料となっている漢籍のひとつである『福恵全書』に光を当てて、この辞書におけるその用いられ方を検討するとともに、『福恵全書』の日本語学における資料性について言及しようとする。なお『福恵全書』からの引用例には返り点が付くが漢籍として扱われていることは、その用例が日本語資料の例と区別されて末尾に添えられているので、凡例に照らして明白である。

本稿では、『日本国語大辞典』は『日国』と略称を用いる。話題の主たるところは第二版であるが、初版、第二版を区別するときは文脈上判断できるようにする。また『日国』第二版は冊子体およびジャパンナレッジ所収のオンライン版を用いた。

『福恵全書』は17世紀末、中国康熙年間に刊行された官吏のための執務心得とされる⁽¹⁾。全三十二巻で日本には何度かにわたり輸入された。版種は十余種あり⁽²⁾、本稿筆者の推定では日本には都合60部程が現存する。この中国版を幕末1850（嘉永三）年に小畑行簡が訓点と訳解を付して和

刻した。この和刻本はよく行われたようで現存部数も推定 180 と多い。和刻本に異版はなく、その本文は意図して手を入れたところは見当たらず、中国版本と全同といってよいほどである。

『日国』の『福恵全書』の用例の確認には、中国版本はネット上で閲覧できる宮内庁書陵部蔵本（懐徳堂本 函架番号 205-28）と国立公文書館蔵本（宝翰楼本 請求記号 297-0039）を、和刻本は家蔵の通行本⁽³⁾を用いた。

2. 『日国』と『大漢和辞典』との関係

『日国』では漢籍も用例を提供している。その資料数については不明だが、相当数の見出し項目において国書の用例のあとに漢籍例が挙げられている。その役割のひとつは言うまでもなく日本語語彙と中国語語彙との歴史的関係性の推測にあると考えられる。

辞書を用いて語史、語誌を思い描くときは諸用例を時代の順序性で読み込む。意味用法のことも、表記のことも、語形のことも、それらをひっくるめて中国語例は日本漢語の個別な歴史の素描に役立つし、そのための役割を担わされている。

したがって、漢籍の用例はできるだけ日本語の語史を推測するに有益有効であるような例が好ましく、また用例として用いられる文献は出来るだけ多くの日本語使用者が読んでいたことが推定されるものがよい。和刻本漢籍はその点で用例を提供する資料たりうる。

『福恵全書』は和刻されてよく行われたことから、日本語への影響も推測されるので、その役割を担うに十分な資料と目される。

さて、『日国』第二版において『福恵全書』はどのくらいの用例を提供しているか。オンライン版の検索機能である「用例（出典情報）」、「全文（見出し+本文）」で調べると、185 見出し、186 用例が使われている。この数の違いは、見出し語「ぼくはい【木牌】」において、語義を分かった①および②のそれぞれに『福恵全書』から挙例しているためである。

『福恵全書』から採られた用例の所在分布には特に偏りはなく、全 32 巻のうち 25 巻と 30 巻以外は全てが使われている。

185 見出しという数字が意味を持つかどうかわからないが、同じ方法に

よって、いま仮に『和刻本漢籍随筆集』（古典研究会 1971年－1978年汲古書院）所収の98種の資料について、『日国』への用例の提供度合いがどの程度であるか調べてみた。

引例の大のものからいくつかを列記してみる。カッコ内はその資料の用例がある『日国』の見出し語数。

顔氏家訓 (160) 文心雕龍 (71) 拾遺記 (48) 酉陽雜俎 (46)
西京雜記 (41) 輟畊錄 (41) 搜神記 (32) 荊楚歲時記 (29)

またそれ以外の近世を中心とした漢籍のいくつかについて、思いつままに同様に調べてみた。

本草綱目 (3033) 蘇軾 (577) 宋書 (286) 世說新語 (179) 陸游 (174) 元史 (75) 景德伝燈録 (74) 資治通鑑 (68) 碧巖録 (64) 清会典事例 (49) 通俗編 (41) 事物紀原 (36) 明史 (34) 朱子語類 (33) 長生殿 (30) 五灯会元 (26) 明律 (25) 陔余叢考 (25) 清会典 (21)

その書籍の丁数を考慮していないが、これらに比すと『福恵全書』の用例がある見出し語 185 は相当に多いとはいえる。

なぜこのように『福恵全書』は多くの用例を提供することになったのか。それはおそらく『日国』初版の編集顧問に諸橋轍次が入っていたことによるのであろう。『日国』初版の編集開始時には諸橋徹次の『大漢和辞典』はすでに刊行されていた⁽⁴⁾。『大漢和辞典』には『福恵全書』がかなり用いられている。例えば見出し漢字「愨」には熟語が2項目あるがそのいずれにも、「哄」には17の熟語があるがそのうちの3項目に、『福恵全書』の用例が挙げられる。

『大漢和辞典』に『福恵全書』が資料となった事情は不明だが、編纂時には近世近代中国語の資料としては当然視野に入るものだったのかもしれない⁽⁵⁾。

仮に『大漢和辞典』が『日国』に情報を提供していたのなら、その初版には関係性を示す様相がみられるはずである。その検証を試みる。

『日国』初版では、個別の資料がどのような語に用いられているかを容易に知る手立てはないので、第二版の『福恵全書』の用例の使われ方が初版ではどのようなものであるかを見たうえで、初版と『大漢和辞典』とを比較す

ることにする。

その結果、第二版で『福恵全書』を用例にもつ185見出し語のうち、初版からある見出し語は151、用例数は152で、34語は第二版での新規項目であった。この初版の151の見出し語のうち、147語は『福恵全書』の用例を挙げていて、その所在表示と引用文は第二版と同一である。残る4見出し語（「管理・境遇・緊縮・事件」）には『福恵全書』の用例はない。

そこでまずこの147語について、『大漢和辞典』には『福恵全書』の用例があるか、ある場合はどの箇所を引用しているかを確認すると、143語は引用箇所まで一致した。従って、ほとんどが『大漢和辞典』から用例の提供を受けているとみてよい。「根因・親験・点視・封套」の4語は『福恵全書』を用例に持つが引例の箇所は『日国』とは違う。よって、この4語は『日国』が独自に求めた『福恵全書』の用例であるとみる。

ちなみに、『日国』初版に『福恵全書』の例がなかった4見出し語は『大漢和辞典』ではどのような典籍の用例を挙げてているかを見ると、「管理」「事件」は『清会典』等を用例にしている『福恵全書』は使っていない。「境遇」は漢籍も国書も例に挙げていない。ここから『日国』第二版の「管理」「事件」「境遇」の3見出し語の『福恵全書』の用例は『大漢和辞典』とは直接の関係はないということになる。「緊縮」については『大漢和辞典』では『福恵全書』を用例に使っていて、かつ『日国』第二版での用例はこれと一致する。したがってこの語については『日国』初版では『大漢和辞典』に記載の用例を使用しなかったものの、第二版では用いた可能性がある。

このように、『日国』初版と『大漢和辞典』は『福恵全書』の用例に関して、一部を除き引用箇所まで一致するので、両者が関連あること、まずは確かである。

また、『日国』初版で用いられた『福恵全書』の用例は、全くそのまま第二版に受け継がれる。さらに言えば、後で述べるように初版での誤りまでもそのままにである。

『日国』第二版で新たに見出し化された34語の『福恵全書』の用例を『大漢和辞典』で確認すると、全て同じ箇所の例であった。ただし引用文の長さについては不同のものがある。従って、第二版の改訂に於いても、

『大漢和辞典』が『福恵全書』の用例を提供したものと考えられる。

以上から『大漢和辞典』が『日国』に情報を提供していたと推測したのは妥当であるとみられる。ただし『日国』は初版でも第二版でも用例を点検しなおして、より適当な長さに整えたことが次の事実からうかがわれる。

引用文を丁寧に比べると、同じ箇所の場合でありながら『日国』の方が『大漢和辞典』より長いという見出し語が半数ほどある。『日国』の方が短いのは「威嚇・牙行・牙税」だけで、残りは同じ長さの引用である。また、『大漢和辞典』の誤りを『日国』が正す例が次のようにある。「在籍」の用例文中「吾」を「告」に、「監倉」では「犯人」を「犯」に正す。「威嚇・口糧・逋馬」では引用文の途中の一部分を欠くのを補正する。「原案・故套・熟識・生意・転斗」では所在表示の誤記を正す。

ところで、『日国』の成立には上田萬年・松井簡治『大日本国語辞典』（1915年－1919年 富山房）の存在を見逃せない。『日国』初版の「倉島長正記」とある「編集後記」に「中国の文献については、『大日本国語辞典』所収の引例を再検討したものを用意し、その「引例をおのおのの原典に当たった。」とある。

そこで『日国』初版で『福恵全書』の用例を持つ見出し語について、『大日本国語辞典』ではどうであったかをみってみる。

その結果は、この件に関してつながりは認められなかった。調査語で用例に用いられた漢籍は四書五経や史記、晋書、宋書であり、明清時代の例は使われていない。『福恵全書』を用例に挙げるのはただ一例「いっしゃせんり {一瀉千里}」があるだけである。この『大日本国語辞典』での「一瀉千里」の引例所在表記は「福恵全書廿九」とだけある。『日国』初版、第二版も同様に「二九」とする。『日国』での『福恵全書』の所在は巻数ではなく部名以下を明示して表示されるのが通例であるからこれは異例である。『大漢和辞典』のその項目のように「郵政部・逐娼妓」とするのがよい。その引用文も『大日本国語辞典』のほうが『日国』より4文字長い。このことから、『日国』の「いっしゃせんり【一瀉千里】」の用例は『大日本国語辞典』に依っている可能性が指摘できる。

また「じょうとう【承鐙】」は、『日国』第二版では初版をそのまま継承して『福恵全書』の「蹄腿粗、銀鞍高、承鐙肉厚」を挙げるほか用例が

無い。その語釈は両版とも「馬の脇腹の前で、鐙のあたる部分にある旋毛。」とするが、これは『大日本国語辞典』が用例を欠くものの語釈を「馬の脇腹の前にある旋毛。」とするのを基にしていると思しい。『大漢和辞典』は『福恵全書』の同じ箇所を引き、ただ「あぶみうけ。」とする。和刻本『福恵全書』でみると「アブミウケ」と訳解が付されている⁽⁶⁾。「承鐙」を『日国』で「旋毛」とする由来は不明であるが、語釈に錯誤があるかと思われる⁽⁷⁾。この項目にも『大日本国語辞典』と『日国』の関連性がうかがわれる。

以上により、『福恵全書』と、『大日本国語辞典』、『日国』初版、第二版、『大漢和辞典』の関係は次のように考える。

『日国』初版の『福恵全書』の引用例は『大漢和辞典』に依っている可能性が高く、そこでこの用例を点検し長さを整えたと考えられる。『日国』の前身たる『大日本国語辞典』の利用は『福恵全書』に関してはごく限られている。『日国』初版の用例を第二版でもそのまま用いたのに加えて、新規項目についても『大漢和辞典』の『福恵全書』の用例を点検のうえで用いた。

用例採集に用いられた『福恵全書』が何であったかは、中国版本、和刻本のいずれであるかを含めて不明である。

なお、『日国』第二版での『福恵全書』からの引例を和刻本で確認すると、ほとんどが当該の語には訳解が付されている。訳解がついていない25語のうち15語については、他の箇所であれば訳解付きの語例が得られる。用例文として適不適があるので一概には言えないが、そういう例もあることを記しておく。

3. 『日国』第二版の『福恵全書』

本節では『日国』第二版での『福恵全書』の用例がどの程度役立っているかを検討する。

まず注目されるのは、用例が『福恵全書』だけで、日本語例は挙げられていない見出し語が結構あるという点である。

一見出し一語義の語の場合は15ある。一見出しに複数の語義を分けている場合にその分化した一語義の用例が『福恵全書』だけであるというの

は10語ある。都合25語が一語釈にあてた用例が『福恵全書』だけである。この事実に対しては、日本語例を挙げないのになぜ見出し語として立項したのかという疑問がたちどころに生ずる。

以下が、用例は『福恵全書』だけの語である。

まず、(ア) 一見出し一語義の語。

あんさく暗索　いちゅう移駐　がこう牙行　がぜい牙税
 かんき環跪　かんさい幹才　けいひょう契票　けいりん恵臨
 しゆくすい宿水　しょうかい省会　じょうとう承鑑　ぜんじ前次
 ひんせい稟請　ふえん赴援　ぼくはい木牌

次に(イ) 語義を複数に分けた語。凡例では語釈は「原則として、用例の示すところに従って時代を追って意味・用法を記述する」とある。『福恵全書』だけを用例に挙げている分化させた語義の番号を合わせ付す。

いちめい一名①　かんしん官箴②　ししょう司掌①
 しゅうしょう衆証②　しょうりょう承領①
 そちん訴陳①　てっしょう鉄匠①　てんとう転斗①
 はんばい半倍②　ふれい不霊③

『日国』にはこういった中国文献例の挙げかたは少なくないことを今野真二⁽⁸⁾は例示して指摘する。そのうえで「『日本国語大辞典』が見出しとしているのだから、日本の文献での使用はある、と考えてよいのか、どうか。」を知りたくなると言い、それは「日本語がどれだけその漢語を「消化」しているか、あるいは語彙体系内に溶け込ませているか、ということが、一つでも使用例があれば、少しは推測できるから」だと述べる。

(ア) のような語が国語辞書の見出しになり、中国語例だけを挙げる意図は何か。それは日本語としての用例があるだろうという予測、見込み、あるいは期待に基づくものだとみれば一応の納得がいく。『福恵全書』の場合、その語彙が日本語へ流入する可能性はあるという見立てに基づく用例の提示ではないかと推測しておく。『福恵全書』のみならず漢籍資料のみの見出し語が、ことごとくそのような見立てを経ているかは不明だが、日本語辞書である以上、見出し語は日本語として存在するという前提があるはずである。ただしそのような漢語を、他の日本語を差し置いて見出し化することには議論があろう。

例えば(ア)のうち、「がぜい【牙税】」は「中国で、問屋、仲買業などに課する税金。」と語釈する。これなどは日本語辞書としての必要性の順位は低いのではなかろうか。また「ぼくはい【木牌】」は、語義を二分してそのいずれにも『福恵全書』だけを挙げる。同じ漢字表記の「もくはい【木牌】」には全く同様に二分した語義の②に国書の『蔭涼軒日録』だけを挙げる。この日本語例の読みは「もくはい／ぼくはい」のいずれとも決め難いので、これをもって「もくはい」を立項し「ぼくはい」と同様にするのはいかがであろう。また、この中には第二版で新たに立項された見出し語もある。「人の出席することを敬つていう語。」と語釈されている「けいりん【恵臨】」がそれである。これも日本語用例の出現が期待されての立項なのであろうか。

(イ)の例の場合は、先に記した今野の要望に多少は応え得るところがありそうである。例えば「ふれい【不霊】」の場合、意義区分①で「靈験のないこと。靈力をあらわさないこと。」として漢籍『史記』の例だけを示し、②は「精神のないこと。おろかなこと。また、そのさま。」と語釈して和書の『集義和書』(1676頃)と『解剖室』(1907)を挙げる。③は「鈍重なこと。重くて動かないこと。また、そのさま。」と語釈して『福恵全書』のみ例示する。この③の語義にあたる日本語例が見つかることを期待していると考えておく。この見出し語の場合、『福恵全書』をおりこんで語史の予測を想像逞しく行えば、中国では意味の拡張あるいは変化を伴い古漢語から近世へと使われており、日本語に流入したそれは同じような使われ方で近代にまで使用されていると推測できる。ただしこの『福恵全書』の引用箇所は刑名部・詞訟の「湿者呆重不_レ靈也」で、その和刻本は「呆重」に「バカオモク」、「不霊」に「ウゴクコトナラヌ」と訳解を付す。ここは湿った刑具の三木は乾いたそれに比べて自在に操れないことを言っているので、「意のままに動かさないさま」といった意味で、③の語釈にはやや疑義がある。『大漢和辞典』が「②愚凶愚凶する。敏捷でない。」として『福恵全書』のこの例を挙げるのも、語釈と用例にやや隔たりがあること同然である。「しょうりょう【承領】」の場合は「①受け取ること。②ききいれること。承知すること。領承。承了。」とあり、用例が①は『福恵全書』、②は『新聞雑誌』『東京朝日新聞』である。「てんとう【転

斗】」の場合は、①が「訴訟状を入れる箱」で『福恵全書』、②は「郵便ポスト」で『米欧回覧実記』を出す。

「承領」「転斗」いずれの項目も、『福恵全書』と近代日本漢語との親密性を示しているようで、その点では有用だが、①②と分けた意図まで読み取るには日本語の用例が少なすぎる⁽⁹⁾。

次に（ア）（イ）としたもの以外の見出し語 160 語について述べる。いずれも日本語例に加えて『福恵全書』の例が挙げられている。これらは用例に漢籍例を合せて示す意図からみて、『福恵全書』の用例がその語の歴史を推定するに大なり小なり有効であるという前提があるものと推測される。

この 160 語のうち、『日国』での日本語例の初出が江戸期以降のものが 130 ほどある。これは『福恵全書』の用語の時代的な特性を反映していると思われる。

160 語のうち日本語例が 1 例のみという見出し語が 64 もある。その多くは語義の分化はない語である。話題にしている見出し語の 3 分の 1 というのは感覚としては多いように思われる。そのほとんどが日本語例の初出が『福恵全書』刊行以降の語である。また『日国』には「辞書」欄が用意されていて古辞書から『言海』（明治二十四 1891 年）までが挙げられているが、この 64 の見出し語のうち「辞書」欄に記述があるのは、「さんにゅう【攪入】」の 1 語だけで『和英語林集成再版』を挙げる。

このように『福恵全書』を用例にする見出し語の一定数は、挙げる日本語例が少なく、かつその例は新しい時代のものである。とすれば、日本の近代漢語と『福恵全書』とは直接ではないにしても、有縁性があるということを示しているようである。少なくとも『日国』の用例の出し方においてはそのように理解される。

この 64 語は現代には用いない語がほとんどであり、多くはいわば幕末明治初期に限定される時代語であり書面語であった可能性を思わせる。またそれらの語において漢籍用例の資料として『福恵全書』が果たしている役割は、その多くの語が中国近代語に基づく近代日本漢語であることの裏付けを成していることと考える。ただしこれらが日本語としてどの程度一般化した語であるかはここでは不明と言わざるを得ない。

日本語例が複数あるうえに『福恵全書』の例が加わる見出し項目は、結局 185 見出しの内の 96 である。

ここで注意されるのは、この 96 の見出し語のなかには奈良時代の文献だけを引例する語もあることである。このような例と 17 世紀末に成立した『福恵全書』の例とはどのような結びつきを持つのか。

例えば「しつじょう【執仗】」は「刃物、その他の武器を持つこと。」とあるが、出典は『律』(718 年)、『続日本紀』(702 年)と『福恵全書』の例を挙げる。この場合『福恵全書』はどのような役割を担って挙例されているのか。

「こうざ【公座】」は①「律によれば、公罪に座すること。公罪を犯すこと。」とし、『律』『続日本紀』を挙げ更に『福恵全書』を加える。②は「おおやけの席。公衆の面前。」とし『宋書』を出す。なお『大漢和辞典』の「公座」も『福恵全書』の同じ例を挙げるがその語義は②「官吏が公務を執る席。」とする。和刻本『福恵全書』でのその箇所は「午時升_レ堂_ヲ将_ニ公座(シラスノコシカケ)移_{シテ}置_ク捲棚(シダシノエンサキ)ニ」である(漢字語に付された訳解をカッコ内に記す。)。これらから見ると、むしろ②の用例と考えるべきではないか。

この二語の如き引例の場合は、後代の『福恵全書』を用例として出す積極的な意義はどのようなことになろうか。

このような語では古い時代の漢籍例の掲出も望まれるが、中国語では熟語か二単語かという認定は存外難しいところがあるようであるから、挙例がさほど容易ではないのであろうか。

無論今挙げた語のような例はむしろ少ない。多くはいくつかの用例が時代をつなぐので、語史を考える上で『福恵全書』の用例にはなんらかの役割が認められる。

「もうせい【猛省】」は『正法眼蔵』(1231 年)、『文明本節用集』(室町中期)、『大学垂加先生講義』(1679 年)、『偽悪醜日本人』(1891 年)、『病牀六尺』(1902 年)、そして『福恵全書』を挙げる。用例が鎌倉時代以降のものであることから、中国の『漢語大詞典』にあたってみるとやはり用例は宋代以降である。このことからこの漢語の使用は日本では比較的新しく、その現代語に続くさまが『福恵全書』を置くことでより理解が行く。

「ちえん【遅延】」は、『性霊集』（835年頃）、『日葡辞書』（1603年）、『忠臣水滸伝』（1799年）、『新聞雑誌7号』（1871年）、『内地雑居未来之夢』（1886年）に加えて『福恵全書』を挙げる。これなどはこの語が日本でも中国でもおおよそ同じ意味で使われ続けていることを推測させる。『漢語大詞典』では「遅延」は宋元以前の例を挙げていないことや現代中国語では「延遲」「遲延」が使われていることがあるにしても。

「きょうおう【供応】」は『日国』の漢字表記は「饗応・享応・供応」を挙げる。また「語誌」として「「供」は現代表記における代用字。」とする。『福恵全書』の訳解付きの漢字語には「饗応」「享応」は見当たらない。語義は二分されているが①には『大鏡』『今昔物語集』『色葉字類抄』を例示する。②の語義ブランチでの用例は古典籍の『明衡往来』『徒然草』に『室町殿日記』『東海道中膝栗毛』さらに『米欧回覧実記』、森鷗外（1916年）、松本清張（1958年）を挙げ、『福恵全書』を加える。全体を見ると『福恵全書』は語史を推定する資料の役割を果たしうる。また用字については『米欧回覧実記』の「享応」、松本清張の「供応」以外は「饗応」であるから、『福恵全書』に見られる中国語としての「供応」は日本語に関与したのかどうか、戦前までの日本語例に「供応」が無いのか、「供」は代用漢字とする記述はもう少し丁寧であるほうがよいのではないかなどあれこれ考えさせてくれる。更には中国語ではこの三つの漢字語はどのようなことになっているのかも知りたくなる。

近似した性格の資料の用例がいくつかの時代をつないでいければ理想的だが、実際にはそうはいかないので、この語のようにせめて隔たりのある複数の時代にわたる用例の提示が望まれる。

江戸時代以降の日本語用例を複数挙げるのに加えて『福恵全書』を例示している語についてみていく。この類の見出し語が最も多い。初出例が江戸期のもので、明治時代以降のものに便宜的に分けて述べる。

初出例が江戸期の語には日本語の用例が3から5あるのが多いのに対して、明治期以降に初出例がある語では3例程度が多い。

江戸期に初出のある語をいくつか例に挙げる。

「ふんごう【吻合】」は①「物事がぴったり合うこと。一致すること。」とし、『信長記』（1622年）、『惺窩文集』（1627年頃）、『椿説弓張月』（1807

年)、そして森鷗外の1916年の小説、平野謙の1946年の著作を挙げる。これに『福恵全書』の例を添える。②③は医学的な語義で、用例はないが現代の用法なのであろう。この見出し語項目に見るように、『福恵全書』は役割を果たすのに良い位置をしめる用例になっていることが多い。逆に言えば、他にはふさわしい漢籍例がないものと理解してよいのかが気になる。

「じゅよう【需用】」は幕末の『輿地誌略』(1826年)を初出に、『西国立志編』(1870年)、『性法略』(1871年)、そして1893年、1914年の著作物の例を挙げ、『福恵全書』を添える。この見出し語には「語誌」が付いていて別項目「需要」との関連を述べる。「需要」には漢籍例がなく、「辞書」欄では『言海』を出す。「需用」は『言海』には登録されていない。中国での「需用」「需要」の使用状況を知りたくなる。

初出例が江戸期ながら用例が少ない見出し語として「こうへん【哄騙】」を挙げてみる。『近世説美少年録』(1829年)と『明六雑誌』29号(1875年)、それと『福恵全書』である。いま日本語例の書目を列挙する余裕はないが、このように幕末明治期の新漢語を含むと期待される資料が多いという感じを持つ。このことは『福恵全書』という資料の性格とも関係しているようにもみえる。

明治期以降の資料により日本語例を『福恵全書』の例とともに挙げている見出し語について述べる。

例えば用例を多く挙げるものとして「じょうぎ【情誼】」を見てみる。語義は「誠意をもって人とつきあおうとつとめる気持。」として、『広益熟字典』(1874年)、『改訂増補哲学字彙』(1884年)、『当世書生氣質』(1885年)、『社会百面相』(1902年)、国木田独歩『夫婦』(1904年)、そして『福恵全書』を挙げる。『福恵全書』は語史を考える上でいいポジションにある。なお、『広益熟字典』だけは漢字表記が「情宜」であることに目が行く。

このグループの見出し語には現代でも使う語が多いのが特徴である。そのような語の日本語例に添えられた『福恵全書』の用例がもつ意味は大きい。

「げんあん【原案】」の用例は『経国美談』(1883年)、『当世書生氣質』

(1885年)、『思い出の記』(1900年)、そして『福恵全書』で、語史が見通せる。「きんしゆく【緊縮】」は「弛緩」を対義語とする①の語義で『門』(1910年)、『道程』(1914年)そして『福恵全書』を挙げ、経済方面の語義の②には大阪毎日新聞(1929年)、西尾信治『東京エロオンパレード』(1931年)を挙げる。初版のこの見出し項目の用例は『門』『道程』だけであったが、『福恵全書』等が加わり項目は充実した。

「じけん【事件】」は語義を三つにしているがその①の初版での引例は『慶応再版英和対訳辞書』(1867年)、『大日本帝国憲法』四〇条(1889年)だけであったが、第二版では福沢諭吉の『西洋事情』(1866年)と『福恵全書』が加わった。「事件」が中国由来の新漢語である可能性を示唆するのに役立っている。「かんり【管理】」も語義を四つに分けるが、その①には、『日国』初版の『西国立志編』(1870年)、『日本開化小史』(1877年)、『思い出の記』(1900年)に加えて、第二版では中国白話小説の翻訳本『通俗赤繩奇縁』(1761年)を挙げ、さらに『福恵全書』を添えて、その語の歴史を推測させる。「きょうぐう【境遇】」もまた同様で、用例に『福恵全書』が追加されたことでその語史は見通しを得た。

初出の日本語例が大正末昭和初の見出し語もある。

例えば、「いっぴょう【一票】」は生方敏郎『明治大正見聞史』(1926年)と『福恵全書』、「さつげん【擦減】」は芹沢光治良『ブルジョア』(1930年)と『福恵全書』だけである。

「ざいせき【在籍】」は『女工哀史』(1925年)、井上友一郎『菜の花ざかり』(1956年)、真継伸彦『林檎の下の顔』(1971年)、そして『福恵全書』を挙げる。なお『福恵全書』のこの用例は和刻本では「在籍」として「籍」に「ウマレドコロ」と訳解を付し、『大漢和辞典』も同じであるが、『日国』は返り点を付けずに「在籍」を一語に扱う。ここには漢籍例の扱いの難しさが見てとれる。なお和刻本には「庄死^{シテ}在籍ノ人丁(ニンベツチャウニアルヒトダ)八千余名」(巻三・2オ2)という例があるので、「在籍」を一語ともとらえていた可能性はあるとみる。

これらは日本語例がかなり新しいのでより早い例があるのではないかということに引っ掛かりを覚えるが、これとは別に次の語は日本語例が辞書のみという点で気にかかる。

「しゅさい【取裁】」の場合、用例が庄原謙吉『漢語字類』（1869年）と『福恵全書』である。『漢語字類』は「後続の漢語辞書に多大の影響を与えた」⁽¹⁰⁾とされる。その引くところ「しゅさい トリハカラヒ」とある。漢籍である『福恵全書』の背後には訳解を「キリモリ」とする1850年序の和刻本『福恵全書』がある。同時代の漢語辞書と和刻本を並べ置いて日本近代漢語を考えるという構図になる。それはそれで面白いが、やはり辞書以外の日本語例が欲しい。「りんぼう【隣封】」は室町中期の『文明本節用集』と1874年の『広益熟字典』、そして『福恵全書』だけというのは、「辞書」欄にも所謂古本節用集がずらりと並んでいることもあり骨格だけを示されたようで、果たして辞書以外の資料からは用例が求めにくいものなのかと、少し妙な気もする。用例を求めた資料の性質に向きの違いがあったのかもしれない。「かんぱく【寒薄】」もキリシタン資料である『落葉集』『日葡辞書』と『福恵全書』だけであり、『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂）にもそれ以上の用例はない。こういうことは『日国』のというより辞書の問題としてあるのかと思う。

総じて『福恵全書』の用例は新漢語である近代語とよく重なる。その意味で、『日国』が近代漢語の参考資料として『福恵全書』を用いたのは有効であったと言える。見方を変えれば、『福恵全書』が日本近代漢語と関連を持つ資料だということも言えるであろう。また、38頁にあげた（ア）（イ）の類の見出し語と用例の関係も、近代語としての日本語使用例の追記を今後に期待してのものと理解するのがよいかと思う。

ここで引用例の誤記について触れておく。辞書に於いて用例及び出典情報の正確さが求められること言うまでもない。『日国』の「編集後記」に、出典検討の作業部会を設けたとあり、初版でも第二版でも出典検討がなされている。『福恵全書』からの引用例を確認してみたところ、次のような誤りがみられる程度でおおむね正確であると言える。

「びべん【備辨】」＝所在表示「発到任示」は「発到任示票」の誤り。なお『大漢和辞典』は正しい。

「ざいせき【在籍】」＝引用文中の「告暇在籍」は「告仮在籍」の誤り。なお『大漢和辞典』は「仮」については正しいが、「告」を「吾」に誤る。

「せいゐ【生意】」＝用例中の「独苦力」は「苦独力」の誤り。なお

『大漢和辞典』の引用文はこの部分を欠く。

これらは初版に誤りがあり、第二版にそのまま引き継がれている。また、第二版で新たに立項された見出し語については『福恵全書』の引用文に誤りは見受けられなかった。

4. 『福恵全書』の利用についての提言

これまで述べてきたように漢籍『福恵全書』は日本語の語史・語誌の理解や記述にとって有用な、意義のある資料であるといえる。その『福恵全書』を今後なお一層利活用するために次の事実を先ず指摘したい。それは『福恵全書』には今日日本語として一般に使われている漢語が多く含まれている、という点である。

『福恵全書』は和刻本が刊行されてから、入手も容易になりよく読まれたと思われるので、日本語との交渉も当然考えられる。それが中国の新しい語彙を多く含む資料であれば、当時の中国語に基づく唐話系の和刻資料や翻訳資料などとは時代的な共通基盤を持つので、直接ではなくとも近代日本漢語の形成にかかわっていた可能性が考えられる。『福恵全書』の内容や実際の語彙からみて、口語的な語彙というより、近世近代の書面語のような語彙が多いのかもしれないが、近代日本語を検討する資料として『福恵全書』はもっと活用されてよい。特にその和刻本には非常に多くの訳解が付されているから利用法はいろいろ考えられる。訳解がどのくらい正確かの問題はあれ、幕末期の一つの理解のさまであるとして扱いに慎重さがあればよいことである。

ある漢語が近世中国語由来であることの傍証として『福恵全書』を利用する研究は、佐藤喜代治⁽¹¹⁾をはじめとして続いているが、特に藁科勝之⁽¹²⁾は明治初期のフランス法の受け入れに関して法律用語として『福恵全書』の語彙が用いられている可能性を指摘している。これは明治新政府が明治元年に編纂した『仮刑律』の「引用書目」十四書のうちに『福恵全書』が挙げられていることから当を得ているものと考えられる。

しかしそれだけでなく、『福恵全書』は多様な内容が折り込まれているため広く日常的な語彙についても日本語との関係が予測されるところがある。

たとえば最早紙幅に余裕がなく多くを示せないが、以下のような一般的な日常漢語（カッコ内は和刻本の訳解）を容易に拾い出せる。これらは『日国』第二版で明治以降の用例しか挙げておらず、漢籍用例もない。

偉業（オホヒナルワザ）・逸脱（ニゲ）・确实（シカト）・各種（イロハ）・
 確証（シカトシタシヨウコ）・顆粒（ヒトツブデモ）・完納（ヨクヲサムル
 タミ）・喚問（ヨビダシ・ラベル）・苦情（ヨリドコロナキマウシタテ）・
 指定（キメル）・事務（コト）・情熱（アツクナリ）・紳士（ソノトチニヲ
 ルクワンニン）・説明（マウシタテ）・調教（ヲシヘ）・登記（カキノセ）・
 発売（ウリダシ）

このような現代一般的に使用される漢語の源流の一つとして『福恵全書』を漢籍例として用いることが考えられる。『日国』第二版までの『福恵全書』の漢籍例は、どちらかといえば幕末明治を中心とした限定的な時代語としての新漢語に対して提示されている。『福恵全書』の漢籍としての役割はもっと積極的に拡大されてよいと考える。

ここで更に提言したいのは、『日国』の「補注」記述に和刻本『福恵全書』を利用するということである。これは江戸期にみる中国版本の訳解付き和刻本の大型国語辞書での扱い一般の問題としても提案する⁽¹³⁾。

『福恵全書』を漢籍の用例とする見出し語のなかにも「補注」記述のあるものが7例ある。「がぜい【牙税】」「さへん【詐騙】」「しょうし【訟師】」には『名物六帖』が、「てつしょう【鉄匠】」には『忠義水滸伝解』が挙げられている。いずれも辞書である。さらに「えんがい【延捱】」「こうへん【哄騙】」「ぶんせき【分析】」には『小説奇言』を出す。『小説奇言』は白話小説の和刻本である。例えば「分析」の場合は語義が分けられているので「①については「小説奇言一三」に「其家財一節、原是父親臨終、親筆分析（〈注〉ワケヲキ）定的」とある。」のように記されている。

これらと同様に、和刻本『福恵全書』の訳解を使って、例えば第二版では昭和期の日本語例を2例挙げるに留まる「逸脱」の場合、「補注」として「早晚小心防護（ヨウジン）^シ母^ニ致^ス逸脱（ニゲ）疎虞（ヲチド）^ヲ。」を加えるのである。

今後の『日国』がどのような形になるかは不明であるが、現状で考えた

とき、上記のような現代語に直結する訳解付きの語を「補注」として添えることが語史・語誌探究のためにも辞書のためにもよいのではないか。

ここで念のため述べれば、「補注」に使われた『小説奇言』は日本語例としても用いられている。例えば「しちみせ【質店】」では「*小説奇言(1753)一「走至=華府典舗(シチミセ)内、以=典錢=為=繇」とある。和刻本『福恵全書』の訳解が日本語例として用いられた例は全くないが、「さくどき(農忙)」「ちゅうどり(侵盜)」「ふわかれ(不明)」など今は若干の例を挙げるにとどめて、日本語例としての利用も提案しておく。

漢籍の語例とするか日本語例とするかは和刻本の漢字語部分を使うか訳解部分を使うかによる違いであり、当然問題はない。ただ、訳解が付けられ流布した近世中国資料の和刻本は、中国語と日本語の架け橋のような役割をしている。そのような和刻本が近代日本語の漢語の歴史を見通すために、大型国語辞書において、より有効に利用できないかと考えるのである。

〔注〕

- (1) 山根幸夫『福恵全書 附索引』(1973年 汲古書院)の「解題」による。
- (2) 荒尾禎秀「和刻本『福恵全書』の漢字に見る通用と誤刻」(『清泉女子大学人文科学研究紀要』第42号 2021年)を参照。
- (3) 注(2)を参照。
- (4) 『日国』初版の「編集後記」(倉島長正記)に、諸橋徹次は編集顧問として名を連ね、編集委員会は昭和三十九(1964)年から開始とある。『大漢和辞典』は昭和三十五(1960)年に大修館書店から全巻が刊行された。なお、本稿で使用の『大漢和辞典』は縮写版第二刷(1968年)を使用した。
- (5) 例えば、鳥居久靖「近十年における文学語彙研究の資料」(1956年『中国語学』50)で佐伯富編『福恵全書語彙解』(1952年 油印本 京都大学東洋史研究室)を挙げている。
- (6) 「承鐙肉厚」の「鐙肉」部分に「アブミウケ」と訳解が付されているが、他の漢字語と訳解の位置のありようも参考にすると、訳解の位置は誤っているとみてよい。

- (7) 『大漢和辞典』の「査截」の語釈は「証拠をしかとしらべる。」とし、『福恵全書』巻六・6ウ1から引例する。その引例箇所を和刻本は「而排里(ネンバン) 臨_レ限_ニ。無_レ憑(シヨウコ) 査_レ截(シカトシラベル) _ニ。」と訓点と訳解を付す。『大漢和辞典』が「しかとしらべる」で十分なのに「証拠を」と付け加えているのは、あるいは和刻本を参考にした形跡かもしれない
- (8) 今野真二『『日本国語大辞典』を読む』(2018年 三省堂) 46頁以下による。なお、他の箇所にも本稿と関わる参考となる記述が多くある。
- (9) 『日国』の「第三版に向けて未収録の用例・新項目」の情報を広く募集している、インターネット上のサイト「日国友の会」がある。
<https://japanknowledge.com/tomonokai/>
- (ア) (イ) に属する語について、ここに情報が投稿されているかを調べた(最終閲覧 2021年3月1日)ところ、次の語については用例の提供がなされている。カッコ内はその用例の出典刊行年。
移駐(1804・1973) 省会(1927) 赴援(1894)
- (10) 松井利彦『近代漢語辞典の成立と展開』(1990年 笠間書院) 37頁による。
- (11) 例えば、「橋本左内の書簡に見える漢語について」(『国語と国文学』第44巻4号 1967年。のち『国語語彙の歴史的研究』(1971年 明治書院)に所収)。
- (12) 藁科勝之『『仏蘭西法律書 刑法』における唐話語彙』(『国文学研究』123集 1997年)ほか。
- (13) 「補注」についての評価は、山田忠雄述『近代国語辞書の歩み—その模倣と創造と— 下』(1981年 三省堂) 1432頁以下に記述がある。